

## 円山応挙の初期画業における 「華洛四季遊戯図巻」(徳川美術館蔵) の位置づけ

竹崎 宏基 (東京大学)

円山応挙(1733~95)筆「華洛四季遊戯図巻」(徳川美術館蔵、絹本着色二巻、以下・徳川本)は、嵐山の花見、四条河原の納涼、盆踊り、歳末の行事という四季の風俗を主題とする。詞書は公家で国学者の高橋宗直(1703~85)が、外題は左大臣・九条尚実(1717~87)が揮毫し、九条家から尾張徳川家へ贈られたものである。大画面が多くを占める応挙晩年の作品に対し、徳川本は画業初期の精密な画風を示す小画面の基準作として重要な意味をもつ。

本発表ではまず、九条尚実の日記『尚実公記』(宮内庁書陵部蔵)の精読を通じ、九条家と尾張徳川家との密接な縁戚関係や、尚実が応挙初期のパトロンで二条家出身の円満院門主・祐常(1723~73)に対し度々作品を注文するなど、親密な関係を築いていたことを指摘する。徳川本もまた、祐常を経由して応挙に制作が依頼されたものと推定される。徳川本にみられる線描主体の岩皴の描法や落款印章の形式も、本作を安永年間初頭(1772~73頃)の成立と判断するのに矛盾しない。すなわち、応挙は比較的早い時期から撰画家をはじめとする公家社会に広く受容されており、このことが後年、宮廷に接近する足掛かりとなった可能性がある。

次に、画面に目を移すと、徳川本の構図は平安末期の「年中行事絵巻」と類似する部分があり、さらには応挙自身が高橋宗直の校注がある同絵巻の模本を所持していたことも諸資料から判明する。また京都の同時代風俗を描くという点は、17世紀後半に制作された奈良絵本系の「十二月遊び絵巻」(チェスター・ビーティ図書館ほか蔵)といった先行例に倣いつつも、徳川本では動きを含みながらも正確性を損なわない人体表現や、衣の文様にみられる繊細な描写といった高い再現性により、応挙の時代に相応しい新たな京の風俗描写を模索しているといえる。この先行する絵巻の古典性を咀嚼しつつも同時代的なものに転化するという発想には、同じく祐常の注文で制作された「七難七福図巻」(相国寺蔵)に通ずる指向も窺える。

また、徳川本の下絵から派生した転写本として、デトロイト美術館本や東京国立博物館本など数巻の白描模本が知られている。前者は国学者の藤貞幹(1732~97)、後者は儒者の柴野栗山(1736~1807)が所蔵しており、彼ら知識人のサークル内で受容され、ここに詩文が付されるなど新たな創造の源泉となった。すなわち、徳川本の原本は公家・大名社会における初期の応挙評価を高める機能を果たしたのに対し、転写本は応挙の名声や技法が市井にも広く享受される一つの契機となり、後の円山派の興隆も、こうした基盤に支えられていたものと考えられる。徳川本は応挙にとって宮廷中枢から得た最初の大事業であると同時に、「京の市井を描く画家」というイメージの流布にも寄与した点で、応挙初期画業を考察する上で欠かせない位置を占めているといえる。